

Webによる若者のHIV/STI感染リスク行動に関する行動疫学研究

研究代表者：日高 庸晴（宝塚大学看護学部 教授）

研究要旨

都市部在住の若者における HIV/STI 感染リスク行動の実態を明らかにすることを目的に、インターネット調査会社の登録モニターを対象に無記名自記式質問票調査を実施した。これまでの性経験の相手が異性のみである男性 1,966 人、女性 2,034 人、これまでの性経験が同性のみまたは同性・異性の両方ある男性（以下、MSM と表記）472 人、性経験が同性のみまたは同性・異性の両方ある女性（以下、WSW）528 人の計 5,000 人からの回答を得た。

「性感染症にかかっていると HIV にかかりやすい」「今、日本で梅毒が流行している」といった HIV/STI 一般知識は異性のみと性経験がある男女に比して、同性と性経験がある MSM および WSW において正答率が高い傾向にあった。HIV 抗体検査の生涯受検率は男性で 13.9%、女性では 28.8%、MSM では 44.9%、WSW 35.0% であり、年齢階級別ではいずれの属性においても 30 代の受検率が比較的高い傾向にあった。全体の 6 割に過去 6 ヶ月間に性行動があり、恋人・パートナーや配偶者など特定の相手のみの者は、男性では 68.6%、女性では 89.0%、MSM では 34.7%、WSW では 79.3% であり、過去 6 ヶ月間のセックスパートナーの人数が複数であった割合は男性で 27.8%、女性では 10.8%、MSM では 59.5%、WSW では 24.3% であった。膣性交におけるコンドーム常時使用率は 30% 前後であった。これらの情報をもとに実態に即した予防啓発メッセージの開発と実施が必要である。

A. 研究目的

わが国ではこれまで MSM を中心に HIV 感染の拡大があり喫緊の課題として捉えられ、今なおその状況は続いている。その一方、梅毒など性感染症は MSM 以外の集団にも流行が認められている現在、MSM 以外の集団も含めた国民への有効な啓発方法の確立が急がれる。限られた人材と資源等の中で、国民一般といった大多数を対象とするのではなく at risk population が高い割合で含まれるとこれまでの疫学データから推測される都市部在住かつ性的に活発な若者や、既に STI 感染不安・クリニック受診者を主要な対象に本研究班では取組をしていく。その中で、比較対照となる集団の動向を把握すると同時に、啓発の試行や介入メッセージの開発に資する集団としてインターネット調査会社に登録する都市部在住モニ

ターを対象に、HIV/STI 知識や行動の実態を明らかにすることを目的に、行動疫学調査を実施する。研究の実施にあたって重要な研究視角は、近年流行が確認されている性感染症の背景要因を探ることのみならず、HIV 抗体検査受検勧奨の推進へ寄与することである。

B. 研究方法

インターネット調査会社のモニター登録者を対象に、HIV/STI に関する知識や性行動の実際、生育歴等について無記名自記式の質問票調査を実施した。調査の実施にあたっての取込基準は 20～49 歳であること、都市部である東京 23 区・大阪市・福岡市在住の男女であること、調査対象人数はこれまでの性経験が異性のみ 4,000 人、これまでの性経験が同性のみまたは同性・異性の両方

の男女 1,000 人を獲得目標人数とした。

質問票は NPO や当事者支援活動団体および国内先行研究を参考に HIV/STI に関する一般知識、HIV 抗体検査受検歴、STI 既往歴、過去 6 ヶ月間の性行動（セックスの相手の種別、人数、コンドーム使用状況）、出会いの手段、生育歴等によって構成した。

（倫理面への配慮）

本研究の実施にあたり、宝塚大学看護学部研究倫理委員会による研究計画の審査と承認に基づき実施すると共に、質問票回答前に厚生労働科学研究の一環として実施する調査であることを記し、研究参加の同意を得られた場合のみ回答を求めた。

C. 研究結果

異性のみ性経験がある男性 1,966 人（東京 23 区在住 696 人、大阪市在住 653 人、福岡市在住 617 人）、女性 2,034 人（東京 23 区在住 638 人、大阪市在住 680 人、福岡市在住 716 人）、これまでの性経験が同性のみまたは同性・異性の両方ある男性（Men who have Sex with Men の略として以下、MSM と表記）472 人、性経験が同性のみまたは同性・異性の両方ある女性（Women who have sex with women の略として以下、WSW）528 人の計 5,000 人からの回答を得た。平均年齢は男性 41.3 歳、女性 37.5 歳、MSM40.5 歳、WSW36.5 歳、大卒以上の学歴割合は男性 62.6%、女性 46.6%、MSM63.8%、WSW44.2%であった。

これまでに性的な魅力を感じたことがある相手が同性のみ、同性・異性のどちらにも感じた割合は男性においては 5.8%、女性では 14.3%、MSM では 84.3%、WSW では 86.6%であった。

本稿では、質問票中の主たる項目である HIV/STI 知識（表 2）、HIV 抗体検査受検歴および受検場所、STI 既往歴（表 3）、パートナーの有無、過去 6 ヶ月間の性行動（表 4、5）、生育歴（表 7）、精神保健医療の受療歴（表 8）について報告する。その他の項目については表を参照されたい。

HIV/STI 知識（表 2）

「性感染症にかかっていると HIV にかかりやすい」の正答率は、男性 39.9%、女性 36.8%、MSM55.7%、WSW43.2%であった。「今、日本で梅毒が流行している」の正答率は男性 58.7%、女性 55.9%、MSM68.4%、WSW58.0%、「性感染症に感染しても症状が出ないことがある」の正答率は男性 60.5%、女性 66.8%、MSM70.3%、WSW69.7%、「エイズにかかるとすぐに死ぬのではないかと思う」男性 66.5%、女性 66.6%、MSM67.4%、WSW68.9%、「女性の場合、HIV の検査には内診がある」男性 15.5%、女性 27.0%、MSM20.3%、WSW28.8%、「その日のうちに結果がわかる HIV 検査がある」男性 28.4%、女性 29.1%、MSM45.6%、WSW31.8%であった。性別やセクシュアリティなどに関わらず同程度の知識浸透の状況である項目と、明らかに差があるものが混在していたが、概ね MSM における正答率が高率であった。

HIV 抗体検査受検歴（表 3）

生涯受検歴は男性で 13.9%、女性では 28.8%、MSM では 44.9%、WSW35.0%であった。過去 1 年間の受検歴は男性で 2.2%、女性では 7.4%、MSM では 15.5%、WSW9.3%であった。年齢階級別ではいずれの属性においても 30 代の受検率が比較的高い傾向にあった。

HIV 抗体検査受検場所（表 3）

生涯受検経験がある者の受検場所は男性では保健所や保健センターが 46.7%、病院・クリニックなど医療機関が 50.4%とほぼ同程度である一方、女性では保健所や保健センターが 20.9%、病院・クリニックなど医療機関が 77.9%であった。MSM においては保健所や保健センターが最多の 57.1%、WSW においては病院・クリニックなど医療機関が 78.4%と最多であり、傾向が異なった。

STI 既往歴（表 3）

梅毒・A 型肝炎・B 型肝炎・クラミジア・淋菌

感染症・尖圭コンジローマ・性器ヘルペスといったいずれかの性感染症の診断を受けたことがある割合は、男性で 14.3%、女性では 21.6%、MSM では 32.4%、WSW では 28.6%であった。年齢階級別ではいずれの属性においても 30 代の既往歴が比較的高い傾向にあった。

パートナーの有無 (表 4)

現在男性のパートナーがいる割合は男性で 1.5%、女性で 75.3%、MSM で 22.0%、WSW71.0%であり、女性のパートナーがいる割合は男性で 67.1%、女性で 0.2%、MSM では 47.9%、WSW5.7%であった。

過去 6 ヶ月間の性行動 (セックス経験率、人数、コンドーム常時使用率) (表 4、5)

過去 6 ヶ月間のセックス経験率は男性では 66.0%、女性で 58.8%、MSM では 69.7%、WSW58.5%であった。男性と女性のセックスパートナーの性別はすべて異性であるが、MSM のセックスパートナーの性別は男性のみが 26.3%、女性のみが 14.2%、男女両方が 11.0%であり、WSW においては男性のみ 16.3%、女性のみ 2.8%、男女両方が 3.2%であった。

過去 6 ヶ月間のセックスパートナーの種別が恋人・パートナーや配偶者など特定の相手のみの者は、男性では 68.6%、女性では 89.0%、MSM では 34.7%、WSW では 79.3%であった。過去 6 ヶ月間のセックスパートナーの人数が複数であった割合は男性で 27.8%、女性では 10.8%、MSM では 59.5%、WSW では 24.3%であり、MSM および WSW のその割合は性経験が異性のみの男性および女性のおよそ 2 倍であった。

過去 6 ヶ月間にセックス経験があった者の膣性交におけるコンドーム常時使用率は、男性で 33.1%、女性で 31.5%、MSM では 23.9%、WSW では 27.5%であり、男性・女性・MSM においては年齢が上がるにつれて常時使用率は低下傾向、WSW では 40 代の常時使用率が最も高率であった。アナルセックスにおける常時使用率は男性

34.4%、女性 34.9%、MSM では 40.3%、WSW では 28.9%であった。

コンドーム不使用理由は男性、MSM、WSW において「気持ちがいいから」がそれぞれにおいて最多であり、男性および MSM において突出していた。また、「セックスの相手の方からコンドームを使おうとすると、印象がよくなる」と一定数が回答していた。

生育歴 (表 7)

小・中・高時代におけるいじめ被害生涯経験率は男性では 25.5%、女性で 33.6%、MSM37.7%、WSW44.1%、不登校の経験率は男性で 6.5%、女性で 7.8%、MSM においては 13.3%、WSW では 12.9%であり、異性とのみ性交経験がある男性・女性より MSM および WSW において経験率が高いことが示されている。

精神保健医療受療歴 (表 8)

心理カウンセリング・心療内科・精神科などの精神保健利用受療歴について尋ねたところ、これらいずれかの受療率は男性で 18.2%、女性では 23.2%、MSM では 30.5%、WSW34.3%であり学齢期のいじめ被害経験率同様に異性とのみ性交経験がある男性・女性より MSM および WSW において経験率が高いことがわかった。

D. 考察

HIV/STI 一般知識は異性のみと性経験がある男女より、同性と性経験がある MSM と WSW において正答率が高い傾向にあることは、国内先行研究が示すところと同様であった。同性間の性的接触による HIV/STI 感染の拡大がある現在、当事者においても情報に接する機会が多いためと思われる。一方、「エイズにかかるとすぐに死ぬのではないかと思う」の正答率は属性による違いはなく一定程度浸透していることが示唆された。

HIV 抗体検査受検率は生涯および過去 1 年間の受検ともに、MSM と WSW において高率であった。受検場所が男性であれば保健所や保健センタ

一が比較的高率である一方、女性の場合は病院・クリニックに偏っており、アクセスのしやすさに性差があると言えよう。また、STI 既往歴は一定数存在するとともに、いずれの属性においても 30 代の既往が最も顕著であった。同時に過去 6 ヶ月間のコンドーム常時使用率は 30%程度であり概して低く、さらなる啓発と予防介入のニーズがあると判断された。学齢期におけるいじめ被害や不登校経験率や心理カウンセリング・心療内科・精神科などの精神保健に関わる医療機関の受療経験率も、MSM と WSW において高率であった。これらのことから、国内外の先行研究で示されているとおり LGBT をはじめとするセクシュアルマイノリティが学齢期から思春期青年期に生きづらさを直面する現実があること、状況によっては心理カウンセリング等の精神保健医療の専門的支援が必要な状況があることが、改めて示された。これまでの性経験が異性のみの集団においても同性・両性の両方に性的な魅力を感じた者も含まれており、言うまでも無く MSM や WSW も顕在化・可視化しづらいがその存在に配慮した健康教育や啓発・予防介入の実施が求められる。

インターネット調査会社の登録モニターを対象にした調査であるため、対象集団の傾向に一定のバイアスがあると考えられそれを反映した結果である可能性があることに留意が必要であろう。

E. 結論

都市部在住の 20~40 代の現状が明らかになると共に、性経験の相手が異性のみ、同性および異性の両方と性経験がある男女の比較もすることが出来た。次年度に実施を計画している啓発・予防介入に資する多岐にわたる情報を獲得できたと見えよう。

F. 発表論文等

1. 論文発表

(英文)

1. Nishimura YH., Iwai M., Ozaki A., Waki A.,

Hidaka Y. : Perceived Difficulties Regarding HIV/AIDS Services among Public Health Nurses in the Kinki Region of Western Japan: Implications for Public Health Nursing Education in Japan, *Open Journal of Nursing* , 2017 , 7(3) : DOI: 10.4236/ojn.2017.73033.

(和文)

1. 津田聡子・日高庸晴 : 性に関する教育における中学校教員の意識調査-教員の性別・学修経験と苦手意識との関連 -, *思春期学*, 2017, 3(35): 305-320.
2. 日高庸晴 : 子どもの人生を変える先生の言葉, *教職研修*, 教育開発研究所, 2017, 3 : 73.
3. 日高庸晴 : 思春期に直面するライフイベントとリスク行動, *教職研修*, 教育開発研究所, 2017, 2 : 77.
4. 日高庸晴 : LGBT の児童・生徒はどれくらいいるのか, *教職研修*, 教育開発研究所, 2017, 1 : 77.
5. 日高庸晴監修 : セクシュアルマイノリティってなに?, *少年写真新聞社*, 2017.

G. 引用

なし